

氏名	加藤 佑一
ヨミガナ	カトウ ユウイチ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第637号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 彷徨うからだー鑄造によって浮かびあがる痕跡と装飾ー 〈作品〉 「F」「SLEEPING FOREST」「Floating in the air」「The ghost in my room」 「H」 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	赤沼 潔
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	谷岡 靖則
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	前田 宏智
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

私たちは、日々成長する社会の発展の恩恵を受け、より高水準の生活を手にしている。現代社会における技術の進歩は目覚ましく、その発達に合わせて社会は急速な変貌を繰り返している。そして現実世界のみならず、ARやVRの発達により、私たちは肉体という器から精神を切り抜き、仮想現実との間を行き来することも可能になった。この便利すぎる世の中において、時に自分は何者にもなれるような考えに陥ることがある。しかし、精神と肉体の均衡が崩れつつある状況で生まれる考えが幻想に過ぎず、結局のところ自分自身にしかかなりえないのは、現実世界での私たちが、自らの身体の束縛から逃れられないからである。社会が生命のように発展する一方で、私たちは生まれながらにして着実に終焉へと向かい、いずれその生を終える。つまり、社会は人間の存続が続く限り無限だが、私たちの身体は有限であると言える。

現代社会においてなお、身体が有限である事を私が再認識するきっかけとなったのは、2017年に腰椎椎間板ヘルニアを発症した時だった。腰部の激しい痛みから始まり、腰椎間に飛び出した椎間板が神経を圧迫し、半年間ほど痺れを伴う痛みを左脚に感じた。歩くという基本的な動作さえ、杖を必要とするほど困難になり、手術後も後遺症で日常生活に違和感と痛みを感じた。この左脚の「通常」の感覚を失った経験から、精神と肉体の相互関係を再確認したのだった。

肉体に起こった変化の蓄積は、感覚にも影響を及ぼし、現実での動作が意図した動作とかけ離れるたびに、肉体と精神の間に感覚の差異が生じた。当たり前動作ができなくなっていく状況のなかで、肉体と精神が結びついた身体という存在が、不明瞭になっていくのを感じた。哲学者の鷲田清一は、著書『悲鳴をあげる身体』の中で次のように述べる。

わたしの身体は、わたし自身はそこごく限られた一部しか見ることができない。ということは、わたしたちにとってじぶんの身体とは、想像されたもの、つまりは〈像〉（イメージ）でしかありえないということだ。言い換えると、見るにしろ、触れるにしろ、わたしたちはじぶんの身体にかんしてはつ

ねに部分的な経験しか可能ではないので、そういうばらばらの身体知覚は、ある想像的な「身体像」をつなぎ目としてとりまとめられることではじめて、一つにまとまった全体として了解されるのだということである。

鷺田清一は「身体」という言葉を、「からだ」と読む。そもそも「からだ」という言葉は、「身体」「体」「軀」「躰」と様々な形で記される。その存在について、自身が知覚できる情報自体が不明瞭であるのなら、私は自分の身体を完全な形では永遠に理解しえないだろう。変化し続ける精神と肉体の間に揺れる私たちのからだは、現実という果てしない夢の中を彷徨っているとと言える。そのため本論文では、「からだ」が「不完全」であることを改めて認識することで、現代社会における「からだ」のあり方について自他の作品を通して考察する。

本論文は全3章で構成される。

第1章「彷徨うからだ」では、自身の抱える「外的または内的コンプレックス」について言及し、「肉体」と「精神」が不安定な状態にあり、そのため私たちの「からだ」は「不完全」であること。しかし一方の「完全」という概念もまた、その定義は不明瞭であり、「不完全」と「完全」の間に明確な境界は存在しないことを論じる。

第2章「融合と装飾」では、そうした「不完全」と「完全」の「境界」を表現するために用いる「鑄造」という行為が、その制作過程において様々な「境界」を「融合」する行為であることを論じる。そして「金属」という素材と、その表層に「装飾」として刻まれる「加飾」や「痕跡」が、私たちに「幻想」という魅力をもたらすことを示す。

そして第3章「提出作品」で、提出作品の解説を交えながら、現代社会における「からだ」のあり方について論じ、人間が人間たりうるためには「彷徨う」行為が必要不可欠であることを述べる。

#### (論文審査結果の要旨)

本論文は、身体の不完全性を前提に、存在と不在のあいだを彷徨う現代の身体のあるべき姿を、鑄金表現でさぐるようとしている筆者の創作論である。

幼少時の肥満でみずからの身体にコンプレックスを感じてきた筆者は、院生時代に患った腰椎椎間板ヘルニアで、自分のからだでありながら意のままにならない“不完全”なからだを体験する。ここから筆者の作品は、強さへの憧憬を含む半人半獣的な表現から、情報社会における身体の不在を象った提出作品へとつながっていく。

第1章「彷徨うからだ」では、まずこの筆者の二つの原体験について述べる。半人半獣の足や、溶け出した脂肪が蛇へと変わっていく自作品は、彷徨うからだの表象であり、しばしば登場する蛇や、確然と立つ柱は、力を象徴する憧憬のモチーフだったとする。しかしやがて筆者は、両手の欠けた彫刻「ミロのヴィーナス」や頭部のない「サモトラケのニケ」が、欠損によって完全を想起させる“不完全の美”を備えていることから、不完全を受認し、完全と不完全の境界を彷徨うことに表現の可能性を見出すに至る。

第2章「融合と装飾」では、陶芸家の家に生まれ育った筆者が、鑄金を専攻することになった経緯について述べる。筆者にとって、原形を型どりしてつくる鑄造技法は、内（原形）と外（雌形）の境界上に作品が出現するイメージとしてあるらしい。原形は、作品では内部に空洞として転写されることになり、同じ形をめぐって存在と不在が反転、共存する。これが、人体にかぶせた被着の方のみを鑄造した提出作品、「The ghost in my room」「H」に直接つながっていく。ただ筆者にとって陶芸と鑄金は、土と金属という素材の違いはあるが、ともに火という人智をこえた力が作り出す造形として、基底で通じているように見える。

そして第3章「提出作品」で、①「F」②「SLEEPING FOREST」③「floating in the air」④「The ghost in my room」⑤「H」の5点について解説する。繊維状のサイザルが顔をとり囲む鏡状（円形）の①②は、現実とSNSを往き来する情報社会の人間を、人体を消去しそれにかぶせた被着のみを鑄造した④⑤は、ネット社会での身体の後退（あるいは消失）を示しているようだ。

本論文での一連の論述には、筆者の制作テーマが、個人的意識の造形化から、情報社会における「肉体と精神」、すでにどちらがリアルか曖昧になりつつある「現実と仮想」世界へと展開している様子が認められ

る。そして本論文にはじつはもう一つの彷徨として、絵画のイリュージョンとは異なる、実在・立体造形としての工芸・彫刻・建築の境界を超えようとする、いわば造形の“からだ”をめぐる“彷徨”が、伏流としてあるように見える。今後の展開に期待しつつ、学位にふさわしい論考として審査会の承認を得た。

#### (作品審査結果の要旨)

加藤佑一氏の作品は、卒業制作・修了制作から一貫して装飾に関するテーマに重きを置いて制作してきた。今回の作品「彷徨うからだ - 鑄造によって浮かびあがる痕跡と装飾 -」は、自身の「からだ」に存在する精神的・肉体的経験から現代社会における「からだ」のあり方を考察する中で、今迄とは視点を変えて自身の作品としての持つべき装飾性を見直している。それは表層に施す付加的要素としての装飾性であったものから鑄造の制作過程の中で浮かび上がる表層自体を装飾性として捉えるようになって来ていると言えよう。

「変身」「不完全」「未完成」をキーワードに自身の作品を構築し、ブロンズの持つ素材感と向き合い、それらキーワードが持つ境界を彷徨いながらも物が持つ意味合いを再考察するよう提示しながら制作している。それに加え、コンセプトと共に行為としての鑄造プロセスを踏まえ、それらの接点の関係性を巧みに解釈し、繋げていくことにより空間としての鑄造作品として仕上げられている作品には独特な表層が感じられる。

最新の作品である [The ghost in my room]・[H]では、「不在」と「痕跡」をキーワードに制作しているが、原型制作としては布に着目している。鑄造するための原型としては、通常ワックスを用いており、鑄型の中でそれを消失することで空洞をつくり、そこに溶かした金属を流し込みそれが鑄造作品となる。つまり、ここでは造形するためのワックスを布に変えて布自体が消失することで生まれる偶然性を形体の中に捉え、鑄金の制作過程における消失する意味合いと兼ね合わせることで表現を試みている。そこから生まれる表層は試行錯誤した中での痕跡として表出している。それは、今までの工芸にはない発想で現代アートとしての一面も覗かせているが、工芸出身更に鑄金出身だからこそ発想しえる造形となっていると言える。

それら作品がコンセプトに反映されて鑄造プロセスと共に表現されていることは素晴らしく、作品として十分に評価できることから審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者は、審査論文「彷徨うからだ - 鑄造によって浮かびあがる痕跡と装飾 -」の中で幼少時の体験や体調の不具合を通してからだの不完全性を認識し、そこからからだのあり方について鑄金作品を通して論じている。鑄型を通しての虚と実から、からだの完全性と不完全性を意識するが、この間には明快な境界はなく、本人が彷徨いながら体得したこととして鑄造という行為がその様々な境界を融合させる行為であると説く。また、鑄造を通して金属に刻まれる加飾や痕跡が幻想という魅力をもたらすことについて自作を通して結論づけている。この中で申請者は、からだのあり方について常に触れ、鑄造を通してその素材、制作技法の特殊性と可能性で独自の領域に踏み込んでいる。

申請者は、卒業制作、修了制作において、ヨーロッパの遺跡の柱を彷彿させるような柱状形の大型のブロンズのモニュメントを制作していた。特に修了制作においては自身の生い立ちや過去の記憶をその柱状の形態に押し込めた表現となっていたが、博士審査作品においては、5点からの構成となり、自身の過去の経験を機軸としながら、柱状形の形態は消え、具象形態が現れてきた。鑄造技術は多岐にわたり、新しい試みも含みながら、自身のテーマを模索している作品群は、完成度は高いとはいいきれないが心惹かれるものであった。

総合的には、多少の斑はあったが、概ね順調に審査論文は展開され、自身の作品制作の根底にある考えに辿り着いた感がある。制作面においては、最終的に5点の展示となったが、それぞれの関係性や、素材のあり方、コンセプト等が多少散漫になってしまった感は否めない。ただし、鑄金技法の高度な展開や、積極的に表現効果を高めようとした姿勢は評価されるものであり、全審査員から博士学位を認める条件を満たして

いると判断された。